

恒例の抽選会に沸く

＝平成4年度支部総会＝



大学から
安藤・石黒氏出席



発行
早稲田大学校友会
鹿兒島県支部
住所
鹿兒島市金生町3-1
山形屋本部秘書室
☎0992-27-6310(代)

平成四年度支部総会は、大学から安藤信敏常任理事、石黒真一校友代表幹事にご出席頂き、去る七月十八日(土)山形屋七階社交室で開催された。ビデオ「新時代への助走」放映のあと、松元茂支部長からあいさつがあり、一年間の支部の活動状況や大学のことなどが報告された。続いて、平成三年度の決算報告と役員改選案が承認され、安藤常任理事、石黒代表幹事のあいさつで総会を終了した。

引き続き懇談会が行われ、初めて総会に参加された方の紹介や恒例の抽選会があり、会は大いに盛り上がった。最後に校歌「都の西北」を声高らかに歌い散会した。

報告・事務局長 川畑孝則
(S46年商学部卒)
南生建設(株)専務取締役

出席者リスト

石松 利和・小野原 健・板山 正一・岩切 久治・井上 雅彦・大武 進・内上堀 達雄・池田 哲之・大西 洋逸・磯 大作・尾 堂 友紀・池浜 政雄・石神 兼 康・伊東 達雄・熊原 一次・郡 山 節郎・川畑 孝則・寿 洋一 郎・栗山 良昭・上片平 一郎・上片平 良介・越山 純雄・香西 政彦・菊池 龍夫・柿園 晴雄・辛島 史朗・岸本 博之・古謝 将二郎・川畑 善一郎・重野 省三郎・七田 好正・佐藤 眞昭

早稲田大学校友会鹿兒島県支部役員名簿

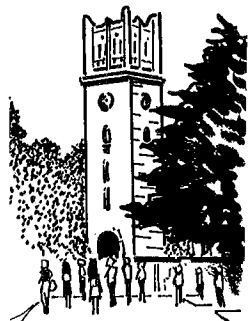
支部長 松元 茂 25 政経
幹事長 大西 洋逸 30 法
副幹事長 古謝将二郎 28 推薦
常任幹事 伊東 達男 29 商
栗山 良昭 29 政経
吉田 守 30 教育
豎山 博美 32 政経
加藤 一徳 40 教育
川畑 孝則 46 商
(事務局長)
前田 通 29 法
増留 貴朗 36 政経
森 睦男 36 商
西園 靖彦 41 商
春田 滋 41 法
浜田 紘一 43 商
岩切 久治 46 政経
玉川 文夫 46 法
上原 一治 48 文
岩下 吉廣 49 政経
尾堂 友紀 49 理工
磯 大作 51 政経
久保 英司 54 政経

監事 堀内 憲夫 28 政経
宮川 秀樹 48 政経
名譽顧問 越山 純雄 15 法
顧 濱田 馨 13 商
川越 政則 14 法
吉田 信夫 17 専商
堀切 達正 17 法
春田 陽三 19 法
重吉栄五郎 19 法
石神 兼康 19 政経
津島 史朗 55 法
津曲 貞利 55 法
吉永 剛 55 商
米盛庄一郎 56 理
大西 儀朋 59 教育
末吉龍一郎 H1 法

坂元 左武郎・末吉 龍一郎・篠 田 崇秀・田中 幸夫・高橋 洋・武田 幸一・豎山 博美・道古 晴彦・田中 健作・藤内 政雄・野見山 洋子・新原 晃・中村 正・西園 靖彦・西嶋 徹也・野間口 一高・永里 紘二・西原 敦・中村 三郎・橋口 幸夫・春田 滋・浜田 紘一・浜田 馨

・春田 陽三・堀内 憲夫・春田 正美・肥後 貞人・藤安 俊夫・伴野 公則・前田 通・松元 茂・丸 純一・森 睦男・三嶋 聡・宮川 秀樹・松清 進也・村 田 久生・山根 京章・吉田 守・米盛 庄一郎・吉田 清彦・吉 井 伸一郎・山之内 義弘

(以上七十五名)



鹿兒島雑感

朝日生命保険相互会社鹿兒島支社

杉浦 義昭 (S 51年政経学部卒)



ひよんな事から鹿兒島稲門会の

磯さん(会報委員)と知り合いになり、いつの間にか原稿用紙に向かうことになった。

早稲田を卒業して今年で十七年目になるが、東京生まれの東京育ちの自分が、はるか鹿兒島の地で稲門会の会報の原稿を書くとは夢にも思わなかった。

小生、保険会社勤務のため所謂

転勤族で、今年の四月鹿兒島空港に降りた時、正直言って友人・知人もないこの地に対して些かの不安は拭いきれなかった。

東京者が持つ鹿兒島のイメージは、桜島、西郷さん、薩摩軍人、イモ焼酎、薩摩揚げに桜島大根が代表的な名詞だろうか、福岡、長崎、熊本などに比べると思い浮かぶものは少々寂しい(失礼の段はご容赦)。

着任早々、社内の鹿兒島出身者に「鹿兒島ってどんな処ですか?」と訊ねると、「いい処ですよ、灰さえ降らなければ。暖かいし、人

情はあるし……」そんな答えを何度か聞いた。

灰の降るのは別として、自分の生まれた土地の「人情味」を誇れる人達は、東京者にとっては羨ましい(そう言えば、この原稿依頼もあふれる人情味の副産物かも知れない)。

鹿兒島市民として半年余りを過ごした今、ようやく少しずつではあるけれど、この地を自分の肌で聞き得るようになってきた気がする。毎日圧倒的な存在感を誇る桜島とその噴煙を見ていると、小さなもの、ひ弱なものは何か出

る幕を失ってしまう。鹿兒島の人にも文化にもそんな逞しさを感じている。

転勤族の哀しさで、あと幾年かで又次の土地へ移っていくのだからけれど、鹿兒島市民で居られる限り、この地でのふれ合いを大切にしていきたいと、ようやく慣れた焼酎を傾けながら思うこの頃である。



藤田 聖二 (S 63年政経学部卒)

(株)鹿兒島地域経済研究所

私にとっての東京

シリーズ 集まり散して

(7)

私は、十一月から就職で東京を離れ鹿兒島に帰省することになった。高校を卒業し上京して以来、私の生活設計は常に東京を中心に考えていたような気がする。今改めて、私にとつての「東京」というものを考えてみたい。

東京と言えば、日本の中心、今や世界をリードする都市といっても過言ではない。又、政治経済の中心地であり、情報の発信源でもある。街には物や人が溢れ、特に

最近では東南アジア系の労働者と思われる外国人が増え、場所によつては、ここは日本なのかと疑いなくなってくる。ウォーターフロント、ジオフロント、新宿の再開

発等あらゆる面で最先端の開発が進められている。この東京で、私は七年間過ごした。その七年間とは、一年間の大学浪人、四年間の

大学生活、二年間の就職浪人である。それぞれの段階で目的があり、東京で生活する必要性を感じていた。東京というところは、ただ生活

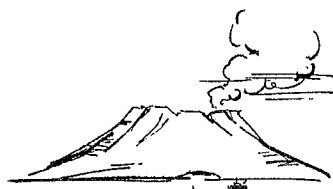
するには決して最適ではないが、目的のある生活を送るには最高の場所であると思う。東京を意識し始めたのは、大学進学の時からだ。それは一種

のあこがれであり、それまで私は九州を離れたことがなく、テレビや知人の話を通してしか東京を知ることがなかった。初めての東京は何もかもが新鮮で、見るもの聞くものすべてに驚かされた。いわゆるカルチャーショックである。

その後一年間の浪人生活と四年間の大学生活を通じて生涯の友ができた。又東京は、私にとって故郷を思う場所であり、両親のありがたみを感じるころでもあった。正直なところ、上京するまで鹿兒島について考えた事など一度もな

かった。「故郷は遠きに在りて思うもの」といわれるように、離れてみて初めてそのよさがわかるものかも知れない。これから故郷に根を下ろし仕事をしていく訳だが、県民の一人として誇りを持ち、鹿兒島の活性化のために努力していきたい。

この東京での七年間の生活が、私を精神的にも人間的にも大きくしてくれたと思う。しかし今、東京に敢えて住む必要を感じなくなつて私は鹿兒島に帰省した。



早稲田の心

大口市助役 二木 和夫
(S17年政経学部卒)



あやまる海岸にて

去る10月22日、別府市のホテル「清風」であった第二早稲田高等学院(昭13・4入学)の毎年恒例(全国持ち廻り)のクラス会(夫婦同伴)に出席しましたが、当時クラスの50名中16名が出席、その中、夫婦同伴10組、単身が6名でした。今、70歳を超える年輩にも拘らず早稲田の杜に育った素朴で、情熱的で、そして人間性豊かな友情は昔のままで、胸が熱くなりました。

緑滴る
戸山ヶ原に、ヶ原に
集う健児の
意気揚る早稲田

を皆で肩を組みながら歌えば、今の自分達の年を忘れ、ただ生きることの喜びにひたり、友情の有難さをひしひしと感じました。
昔、級友と冬の月が恍々と冴え

る戸山ヶ原で、酒に酔って(マントを引つ掛け、さつまの高下駄で)青春を謳歌した時の事は忘れられません。

酔う学徒寒月は右の肩に左の肩に

昭和17年9月25日、政経学部経済科を繰り上げ卒業、10月1日入隊(西部第18部隊)、関東軍司令部兵器部(主計)、終戦、ソ連抑留(アフガニスタンの北の砂漠地帯)、昭和23年10月復員、県庁(26年在職)、奄美群島開発基金(6年)、そして現在大口市の助役三期目ということになります。11月5・6日の名瀬市での県下14市の助役会に出席し、懐かしく美しい奄美の碧い海と青い空、それに温かい人情に触れて、南島の情熱的な歌と踊りに溶け込んでしまいました。そして、

鹿兒島市の内村助役さんに随行された秘書課の久保さん(S54年政経卒)にお会いして原稿を頼まれたということになりますが、とにかく、いつの時代でも、又何処にも、早稲田の心は生きているのだなあーとうれしい気持ちになります。早稲田の心は、私達が、ああ生れてきてよかったという人生

「チンギス・ハーン」

南日本放送報道制作局長 中村 耕治
(S49年政経学部卒)



を口にする事はタブー視されていた。

この秋、日本で公開されたモンゴル映画「チンギス・ハーン」は、日本とモンゴルの国交樹立20周年(ことし2月)を記念して製作された映画で、製作そのものは全てモンゴルの映画人の手によるが、日本の多くの企業が資金や撮影機材を提供した。撮影は足かけ3年に及んだ。3年前といえば、モンゴルで民主化運動が高まり始めた頃で、映画「チンギス・ハーン」は、民主化のうねりの中から生まれた。長い間、モンゴルではチン

の喜びを、みんなで力を合わせて見つけ出し、創り出してゆくのだと思っております。

別府市でのクラス会で、亡くなった畏友M君の御夫人が今年も出席されましたが、M君の葬儀の時、M君の柩を早稲田の校歌で送り出したとの事です。早稲田の心は本当に有り難い。私は公務員ですが、

早稲田のヒューマニズムこそが公務員の心でなくてはならないし、助役の心でなくてはならないと思っております。
私の女房は早稲田が大好きですと言ってくれますが、私はそんな女房が大好きです。
祝ふ日の老ひの命の枯れて舞

一土

去年の夏、私は、南日本放送が毎年夏休みに実施しているカラモニア少年交流の団長として、モンゴル人民共和国を訪問する機会を得た。首都ウランバートルと大草原の小さな村に一週間滞在したが、いたるところでジンギス汗ブームを目撃した。ウランバートルで建設中のモンゴル最大のホテル名はジンギスカンホテル。ホテルで出されたウオツカの名前はジンギスカン(これが、なかなかいけるんです)、物資不足で空っぽの商品棚が目立つデパートでは、ずらりと並んだジンギス汗の人形と肖像画が目をつけた。
モンゴル人民共和国は、旧ソ連に次いで世界で2番目に古い社会

主義の国だ。旧ソ連の弟国として政治・経済とも70年間にわたって旧ソ連の影響下にあった。ジンギス汗は、帝国主義、封建主義の親玉としてマルクス主義のもとに閉じ込められてきた。そのタブーを解いたのが、ペレストロイカの力である。多くの社会主義国で、民主化は民族主義の様相を呈しているが、モンゴルも例外ではなく、民族復興の動きが急だ。ジンギス汗の復活はその象徴である。学校では、古いモンゴル文字(現在は、ロシア語系の文字)の教育が始まり、4年後には公式に国語となる予定だ。社会主義に市場経済、そして民族主義の復活と、モンゴルは今、日本の明治維新と終戦直後が一緒になったような大混乱の最中にある。混乱の世に救世主として出現し、史上最大の帝国を築きあげた「蒼き狼」への熱き思い。モンゴルでは、映画「チンギス・ハーン」の売り発売当日に、2か月先まで売り切れたという。

又も勝ち譲る

全員出席で

熱い戦い

第16回 早慶対抗ゴルフ大会

とは、何とも複雑な気持ちです。今回の早稲田はベストメンバーで臨んで下さい」とのコメントがあった。しかし、何とも慶応に負けるとは昔から悔しくてならない。通算成績も5勝11敗となり、大きく負け越してしまっている。野球でも早慶戦に優勝がかかり苦杯をなめているだけに、鹿兒島ワセダマンの次回の奮気を強く希望するところである。

幹事 大西 儀朋
(S 59年教育学部卒)

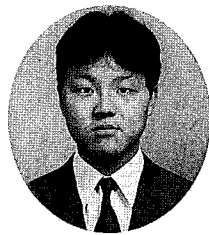
鹿兒島海陸運送(株)取締役

さわやかな風の下、第16回目の早慶対抗ゴルフ大会が名門・喜入カントリークラブで行なわれた。

参加者は、早稲田側11名、慶応側14名で、参加予定者のキャンセルは1名もなく、全員出席のもと熱い戦いが展開された。

開会あいさつ終了後、大西洋逸幹事長のもとに早稲田側が大集合し、幹事長から「連敗を重ねており、今回は是非とも勝ちにいく、ゴルフは技術と口で戦っていたらだきたい」との一言があった。今回はメンバーの中で久しぶりにエースの馬場弘人氏(S 45年教育卒)の参加もあり、必勝体制で臨んだものの、某幹事長のグロスが思わしくなく、人数で勝る慶応にまたも勝ちを譲ってしまった。

ブレイ終了後、成績発表の席上で勝利監の慶応吉富信雄氏から「こちらは2軍で戦って勝ったこ



早稲田の杜を巣立つてから、六年過ぎようとしている。卒業後、ビール会社に五年間勤務し、今春、我が郷里「鹿兒島」へ戻ってきた。世間で言われる「Uターン」というやつだ。

「なぜ地元に戻るのか」決まっていたそんな質問がくる。家庭の事情があったのも事実であるが、私自身、鹿兒島で生まれ育ち、人一倍鹿兒島を愛している男の一人である、僭越ながら自負している。地方に居れば大都会に憧れるし、大都会に居れば地

コンペ成績表

開催日：平成4年11月15日
会場：喜入カントリークラブ

順位	氏名	OUT	IN	GROS	HDCP	NET
1位	山元 正恒(K)	39	41	80	9.6	70.4
2位	春田 滋(W)	48	43	91	20.4	70.6
3位	尾堂 友紀(W)	55	46	101	30.0	71.0
4位	吉田 守(W)	40	46	86	14.4	71.6
5位	吉富 信雄(K)	41	45	86	14.4	71.6
6位	馬場 弘人(W)	43	35	78	6.0	72.0
7位	石原 石(K)	49	47	96	24.0	72.0
8位	本坊 吉幸(K)	43	46	89	16.8	72.2
9位	新村 研二(K)	44	44	88	15.6	72.4
10位	本坊 浩幸(K)	45	43	88	15.6	72.4
11位	内村 二郎(K)	52	51	103	30.0	73.0
12位	本坊 修(K)	50	45	95	21.6	73.4
13位	秋葉 重貴(K)	43	45	88	14.4	73.6
14位	長澤 金吾(W)	44	47	91	16.8	74.2
15位	岩元 恭一(K)	45	46	91	16.8	74.2
16位	大西 儀朋(W)	48	43	91	16.8	74.2
17位	岩元 義弘(K)	55	48	103	28.8	74.2
18位	本坊 吉朗(K)	47	49	96	21.6	74.4
19位	中尾 成昭(K)	48	48	96	21.6	74.4
20位	田中 健作(W)	50	45	95	20.4	74.6
21位	下唐 溱行雄(W)	55	47	102	26.4	75.6
22位	濱田 紘一(W)	48	49	97	20.4	76.6
23位	大西 洋逸(W)	50	49	99	21.6	77.4
24位	荒木 貞夫(K)	53	48	101	21.6	79.4
25位	川井田 哲(W)	59	51	110	30.0	80.0

早稲田で得たもの

南日本新聞社 広告局
岸 本博之(S 62年商学部卒)

持って言い張りたいところであるが、正直言ってしまうのではない。全員の様々な人間と接することができたことだと答える。クラス、ゼミ、サークル、アルバイト等を通じて出会った人達。一期一会という言葉があるが、まさしくその通りだと思っている。深夜、サー

方がいと思うってしまう傾向がある中で、自分にとってふさわしい生き方とは何かを考えた場合、地方にいる立場で生きていきたいと思

早稲田で得たもの。沢山あると思う。まず第一に学問だと自信を

鳥安でとりわきをつつきながら、いっばしの人生論を交わしたと、等々(酒が関わることはかりで恐縮ではありますが)。

想い起こせば「清瀧」を振り出すとして始まった「乾杯」の数は、一体いくつにのぼったことであろうか。果たしてその効果は? 「人

生豊かになった」と思いたいものである。

毎年、野球・ラグビーの季節になると、日頃どこかに眠っている愛校心なるものが目覚めてくる。学生時代のように、神宮球場・秩父宮・国立競技場に行けなくたって、校歌や応援歌が甦ってくる。普段は感じない、いや感じるのを恥ずかしいと思

集まり散じて人は変れど仰ぐは同じき理想の光 言わずと知れた校歌の一小節であるが、早稲田で得た貴重な経験や「早稲田精神」、また五年間の県外サ

ラーイマン体験を心の糧とし、鹿兒島のために何かお役に立てる人間でありたいと思っている。

編集後記

来年の総会は、7月24日(土)に決まりました。今のうちにスケジュールの中に加えておいてください。多くの校友の皆様の参加をよろしく願います。

会報委員

- 吉田 守・磯 大作
- 久保 英司・辛島 史朗
- 大西 儀朋

連絡先

☎〇九九二一七七一六三〇(代)
事務局まで